



WE ARE HOME AT GILLETTE

Ferdinando Frega — Nando the Scribe

GILLETTEこそ、わが家

かつてそうであったすべてを抱えたイタリアの体が、してきたことのすべてを抱えたアメリカの頭と、ふたたびひとつになろうとしていた — 母なるGilletteとその独特の教えから学んだ沈黙のなかで。

私は待つことを尊ぶ術を知っていた。決して急がない。学んだ教訓はこうだ。待つことを知る者には、すべてがやってくる — 焦らずに、そしてそれ以上に、期待せずに待つ者には。

何も求めない人間というのは、いつだって未知数だった。金で買えない人間であることは、男から力を奪う。だが、許可を求めずに取り出すこと — それが私の受けた教えだった。世界中のあらゆる女が、遺伝子のレベルで慣れ親しんでいるやり方で。

ある日、私たちは同じ浴室に、同じ時刻、同じ瞬間に居合わせた — 父と私が、ひげを剃りながら。2人とも同じ時間に同じ会議があり、ルールはいつもひとつだった。早く着くこと。時間ちょうどでは決してなく。

父は一瞬手を止めて私のひげ剃りの儀式を観察し、あることに気づいて驚いた。顔への最初のひと剃りは下から上へ、毛の流れに逆らって。2度目は中央を。そして最後のひと剃りだけが、上から下へ走る。父は微笑みながら、誰に教わったのかと尋ねた。

私は父を注意深く見つめた。理由もなく口を開く人ではなかった。本当の意図を読み解かなければならなかった。だが答えはひとつしかなかった。父さんから学んだのだ — 5歳のころから、毎朝欠かさずひげを剃る父さんをずっと見ていて。40度の熱で寝込んでいるときでさえ、父は起き上がり、ひげを剃り、またベッドに戻るのだった。

そして私が気づいていたのは、父があ最後のひと剃りでは決して逆剃りをしなかったことだ。ざらついた部分こそ男のアイデンティティだ、と言っていたから

である — つるつるにしすぎると、女になってしまう。

2030年5月のその晩、私は自分のボストンの通りを歩いていた。記憶が次々とよみがえってきた。いくつかの涙が、私の人生を、あの旅のすべてを縁取った。

ひとりだったのは、体のうえだけのことだ。頭のなかでは、取り囲まれていた — 私にひとつの言い回しを、冗談を、物語を、お話をくれて、私の記憶を満たしてくれたすべての人々に。そして私は子どものころに、細部を決して忘れないことを学んでいた。細部こそが、あらゆる真剣な会話の土台だからだ。昔からずっとそうだった。

勘定を清算するときが来ていた。そしてそれは、いつだって階段でのポーカーのひと勝負のあと、家に帰る前にするものだ — 勝負の前では決してない。

GILLETTENARRATIVEは、まずレーダーに映った。それから監視下に置かれた。それから調べられ、検証された。そしてそのあとでようやく、そうなるべく生まれたものになった。ひとつの物語に。

誰もがいつも同じことを尋ねた。どうしてたった1ドルですべてを無償で配ることができたのか — そしてどうして、月にたった70ドルでそのすべてを築けたのか。

答えは、ひとつの光景のなかにあった。

私は小屋のなかで、火の前にいた。そして川の向こうに、ボストンのプルデンシャル・センター・タワーを眺めていた — 母が私を迎え入れてくれていた年月、母の家だった場所だ。そしていつも同じことを思った。

摩天楼のなかで暮らすのがどんな気分かを知って、楽しむこともできただろう。だが私には、いまいるまさにその場所にとどまる自由があった — 理由はただひとつ。私は自由だったのだ。

書記ナンド。存在するとは誰も思わない人間。それでも、彼は実在する。そしてあなたはいつでも、彼のしたことの中に彼を見つけるだろう — 彼の言ったことのなかには、決して。

フェルディナンド